

論文審査の結果の要旨

氏名 ロサワン ポンラクサナピモン

本論文は5章からなり、第1章では「持続可能な観光」への移行過程について述べられ、第2章では、タイのナーン県におけるエコツーリズムの状況について分析が行なわれ、第3章では、それと比較する形で日本の埼玉県飯能市の事例が考察され、第4章では「持続可能な観光」を人々のケイパビリティの観点から再考し、最後に第5章では結論と政策提言が述べられる。

持続可能な観光に世界の注目が集まるようになると、タイにおいても観光庁（TAT）が2008年に「地球温暖化に反対する観光」という環境宣言を行ない、それに関連して、「セブン・グリーン」というコンセプトが新しい観光ガイドラインとして提案され、タイ北部のナーン市は、そのパイロット都市の一つに指定された。その有効性を明らかにするために本論文では2011年3月から2013年3月にかけて現地調査を行ない、その結果、次のような結論を得た。すなわち、政府が提唱するセブン・グリーンのメッセージは観光客に十分に知られておらず、また地元の観光関係者の間ではセブン・グリーンという言葉を知ってはいても、その活動を有効なものを見ていなかった。その大きな理由は、環境保護を重視しすぎていて、観光客にとっては観光の魅力とは結び付いておらず、また地元の観光業者にとっては経済的なメリットにつながっていないことが挙げられる。持続可能な観光が成り立つためには、環境保護、社会・文化、経済の三者の間のバランスが重要とされているが、ナーンの事例が示しているのは、これらの3つの要素のバランスを欠いているということであった。

では、これらの3つの要素をバランスさせるにはどうすればいいのか。本論文では、成功例とされている埼玉県飯能市のエコツーリズムを比較対象として取り上げる。飯能市は、地域住民の積極的な参加を促進することによって、独自のエコツーリズム・プロジェクトを実施してきた。その重要なポイントは、このプロジェクトが市と地元の人々の協力によって設計され、推進されているという点である。飯能市は、地域住民がマスターした技能を、彼（女）らだけが提供できるユニークな技能としてツアープログラムに組み込むことを通じて、観光客との間に良好な関係を築くことを住民に奨励している。観光客の視点を通して、地元の住民は、いつも当たり前と思っているものが実は価値のある貴重な資産であることを知ることになり、それが地域の人々に自分自身の町や周りの自然に対して誇りを育むことにつながっていく。それまでの生活を見直すことを通じて、環境や文化の価値を再認識し、それを促進することが人々の真の意味での豊かさとなっている。それが人々を進んでエコツーリズムに関わらせる原動力となり、エコツーリズムがプロジェクトとして持続可能なものとしている。

飯能市でエコツーリズムに関わっている人たちは、単に経済的利益を追求するのではなく、人々をもてなし、環境を守り、社会に貢献することに、価値のある生き方を見つけていると言える。人々の暮らしの良さとは、単に物質的な豊かさだけではなく、社会との関わり方にも影響を受ける。快適な環境も豊かさの重要な要素である。すなわち、環境、社会・文化、経済という3つの要素は、人々の広い意味での豊かさを左右する要因である。我々が注目しなければならないのは、そこに住む人々の暮らしがどのように改善しているかであり、この視点が従来の「持続可能な観光」の分析では欠いていたということである。本論文が行なった重要な貢献は、環境、社会・文化、経済という3要素の他に、「人間」という要素を追加したことである。開発への関心が、経済開発から人間開発（Human Development）に移っているとき、経済成長か環境保護かという対立構造で捉えるのではなく、経済成長も環境保護も人々の暮らしや生き方にどのように影響しているかを考えていくべきである。アマルティア・センは、人々の暮らしを発展の中心に据えるべきだとしてケイパビリティ・アプローチを提唱する。「人間」という座標軸を取り入れることによって、本論文は、従来の「持続可能な観光」にケイパビリティの視点を取り入れようとしたものであり、この点は本論文の重要な貢献である。

なお、本論文の第2章は池本との共同研究であるが、論文提出者が主体となって分析及び検証を行ったもので、論文提出者の寄与が十分であると判断する。

したがって、博士（国際協力学）の学位を授与できると認める。

以上 1,817 字